

応用生物化学系

教員数	教員等数 (人)	教授 19 (20)	助教授 10 (10)	講師 15 (14)	助手 10 (10)	技官〔準研〕 1 (1)	
	異動状況 (人)	退職・転出 6 (4)	昇任 1 (1)	採用 2 (2)	学内 -		
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学会発表数			
		国内	国外	国内	国外		
	64 (56)		147 (118)		191 (177)		48 (52)
	受賞数	3 (1件)					
	研究費等	採択件数		採択率(%)		金額(千円)	
		科学研究費		42.1 (31.3)		134,400 (106,100)	
		学内プロ		41.0 (37.8)		7,720 (9,331)	
奨学寄附金件数・金額		33件 27,400千円		(23件 33,000千円)			
受託研究件数・金額		21件 65,692千円		(20件 109,803千円)			
受託研究員		3 (3人)					
施設・設備							

・()は前年度の数値を示す。

1 応用生物化学系の活動

- (1) 14年度の当学系の人事異動：採用者は3名（教授1名，講師2名）だったのに対し，退職者2名（教授），転出者4名（助教授1名，講師1名，助手1名および準研究員1名）であった。
- (2) 研究活動：研究活動は上表に示すように，活発に行われた。研究発表件数は，国内，国外とも昨年より増加し，特に国外への論文著者発表数は，一昨年，昨年，本年と約30件ずつ増加しつづけており，研究活動が国際化していく傾向がうかがえる。研究費等に関して，科学研究費と学内プロの採択件数および奨学寄附金と受託研究件数はいずれも昨年よりかなり増加傾向を示したが，それらの金額は科学研究費が約3割増加したのに対し，その他はいずれも社会の不況を反映してか，3割程度減少した。なお，若手研究者向けの高額な研究助成（科学技術振興事業団さきがけ研究21；19,123千円，および産業技術助成事業；39,050千円）を計3名（講師2名，助手1名）が継続して受けることに成功した。

なお，下記に詳細について述べるように，本学系の構成員を主とした生物機能科学専攻では，21世紀COEプログラムに採択され，本年度は107,000千円を受領したことは特記されよう。

- (3) 国際交流活動：活発に行われており，本年度はカセサート大学，忠南大学，フィリピン大学ロス・バノス校等から学生や研究者を16名受け入れ，1名の教員を派遣した。

2 自己評価と課題

本年度も昨年と同様2名の教授が定年退官となり，いよいよ学系全体が若換りの時代を向え，21世紀前半の大学を担う人材の選考が大きな課題となろう。研究活動は昨年に比べ上昇する傾向が読みとれるが，金額の低下は国立法人化へ向けて，学系構成員のさらなる活性化の努力が要求される。

3 その他特記事項

- (1) 21世紀COEプログラムに採択：生命科学分野で，本学系の構成員を主とした生命環境科学研究科生物機能科学専攻が，世界最高水準の拠点として採択され，5年間で約10億円（申請額）を補助金として獲得することに成功した。全国の農学系専攻のうち2件が採択され，その1件であり，これまでの本学系構成員の教育・研究の実績と，本プログラムの研究テーマ（複合生物系応答機構の解析と農学的高度利用）が高く評価された結果と言えよう。
- (2) 総合研究棟Aの完成：本学系を含む農林3学系の構成員で構成される農学研究科リフレッシュ教育システムを対象とした施設と大学院重点化等の施設を含めた総合研究棟Aが平成15年2月に完成した。